

「落語と私」 その拾参

三代目 橘ノ百圓

明けまして、お目出とうございます。1年前の第壹回「落語と私」の書き出しも、この言葉で始まりまして、もう拾参回と成りました。ご愛読感謝致します。前回で、圓師匠から付けて頂きました、十六の噺の解説が終わり、今回は、圓師匠から噺を付けて貰っている間の、平成3年10月から開始致しました※素人落語会「小天狗よったり四人会」の事を書きたいと思います。この「四人会」は、組合月報10月号の～お知らせ～欄に載せて頂きましたが、昨年で28回を迎えます。年1回の会ですから、丸27年経っている訳で、私がまだ40代前半テな事です。何故か!?遠くを見る様な目に成っています。そもそも、この会の立上げ理由は、毎年秋分の日、全日本社会人落語協会(JARA)主催の、全日本社会人落語選手権決勝大会テエのが有りまして、昨年で45回を無事終える事が出来ましたが、私も第5回から出演しております。全国から予選を通過した!?落語自慢が、年1回優勝者を決める訳で、それはそれは、楽屋は異様な緊張感が漂い、私はその空気感が大好きでした。それがやはり、同じ様な顔ぶれと成り、年1回の同窓会的な雰囲気を感じる様に成りましたので、同じくJARA会員の、柳花楼扇生さんと相談をして「以前の様な緊張感の在る会を創ろうじゃねエか」テな事で、先ず、出演者数は4人、これは私が、学生時代に「女嫌よったり四人会」と言う、妙な会の経験からの発案で、それに色物を1人、合計5人の出演者で、人選は扇生さんに任せ、結果、ぬりた亭津久蔵、橘ノ百圓、柳花楼扇生、めずらし家芝楽の東京JARAの精鋭?4人と、色物は、寄席の唄として、その当時は素人で活躍してました(現在は、落語芸術協会所属のお囃子さんです)福岡民江、第1回の真打とまりが、めずらし家芝楽と決まり、真打を務める者が前座を演る事と成り、平成3年10月20日(日)神楽坂毘沙門様の貸席で開催致しました。どんな会でも、素人の会は当日お客様の入場を確認するまでは、何人ほど入ってくれるかが心配なのですが、その日は、何故か満員のお客様で、皆んなでホッとしたのを覚えております。只、JARA全国大会の様に、各自が他者との演技を競う訳では無いので、あの時の緊張感是在りませんが、全てが自分との闘いなので、別の想いは今でも感じています。そして私は、毎回必ず根多お下ろしと決めていて、毎年苦しんでおります。「趣味はストレスを解消する」ッてのは、嘘ですよ!別の心の負荷が掛かりますから。第1回「四人会」の演目は

第1回 小天狗四人会

平成参年拾月式拾日(日)

めずらし家 芝楽 「普段の袴」

ぬりた亭 津久蔵 「軒付」

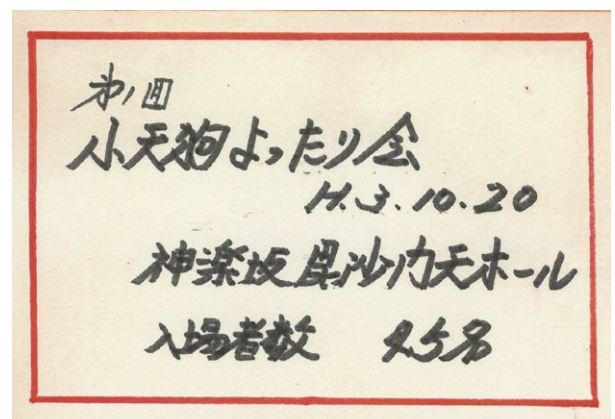
橘ノ百圓 「大工調べ」

仲入り

柳花楼 扇生 「品川心中」

福岡 民江 「寄席の唄」

めずらし家 芝楽 「ねずみ」



この会は全て根多出しで、上記の演目を見ただけで、当時の遣る気が伝わると思います。只「私は必ず根多下ろしと決め」と書きましたが、この第1回だけは、津久蔵さんの要望で、学生時代にテープで覚えた「大工調べ」を落げまでの声で、この漸を懸けた次第です。これは、五代目小さん師匠のを覚えたのですが、当然「大工調べの序でございます」で終わっておりますので、他の人の漸を参考に、自分なりに、どうにか落げまで辿り着けましたが、仕草は細やかな処が心配なので、圓師匠の家に通い、指導を受けた訳です。圓師匠は「大工調べ」は持っていませんが、そこはやはり本職ですから……。大工政五郎が、大家の所で我慢に我慢を重ねて、堪忍袋の緒が切れて、尻を捲^{けつ}って啖^{まく}呵をきるのですが、この時、着ている羽織を袴纏に見立てて捲りますが、ト、直ぐにこの羽織を肩から滑り落として、大家の驚いた様子を現わす手法を教わりました。圓師匠曰く「こう演ると、大家の相が変わる」との事で、圓師匠は、誰の形を伝えてくれたかは分かりませんが、現在、この形を演じ方が居るかは掴んでおりません。又落げの「大工は棟梁」「調べを^{ろう}ご覧じろ」「細工は^{りゅうりゅう}流々」「仕上をご覧じろ」の地口は解りづらいので、中なか落げまでは演らなくなってます。

今でもそうですが、開演は午後2時ですので、12時に全員現地集合、一番、二番、仲入り、追い出しの太鼓、そして、出囃子、^は嵌め物、全て生演奏としましたので、先ず、大胴(大太鼓)、締太鼓、笛、^{かね}鉦を我家から運ぶのが一苦勞で(どう言う訳ですか？我家には一通りの道具が揃っているのです)往きは私が運転をして、全員で荷物を降し、時間貸駐車場に停めて、終演後に又それを積んで、打ち上げ(飲み会)に参加する訳ですが、私には、お客様と一緒に飲むと言う大事な使命!?が在りますので、帰りはカミさんが運転する時期が暫く続きました。途中、芝楽さんが会社の辞令で、広島に転勤に成った為、第3回～第11回の9回は、代演に当時素人の三龍亭^{だるま}多留満さん(現本職の真打、橘ノ圓滿)をお願いした時は、彼も一通りの道具を持っていて、また、酒を飲まないなので、彼をお願いした事も在ります。生演奏と軽く言いますが、先ず、太鼓を^{たた}敲けるのが、扇生さんだけで(私も少しは敲きますが)、笛を吹けるのが私だけ(扇生さんも少し吹けますが)、かなり苦しい遣り繰りで、扇生さん、百圓の出番の時は、笛が無く寂しいです。この出囃子も、各自好みが在りまして、前座は「前座の上り」、津久蔵が「外記猿」、百圓が「正札附」、仲入りの太鼓と笛が入って、扇生が「つくま」、真打は「中^{ちゅう}ノ舞^{まい}」か、芝楽は「鞍馬」、民江さんの出の時は三味線が入りませんので「水音」でした。マアこう書きましても、頭の中で音が浮^{かた}ぶ方は少ないと思いますが、皆本職の大真打の曲ばかりなのです。この辺りが素人なのですヨ。第1回目の「小天狗四人会」も無事終える事が出来、高座の幕を閉めた後に、5人全員で手締めをしました。その後の美酒を飲み過ぎました！

「落語豆知識」

※「素人落語」

6月号の「豆知識」でも書いた様に、江戸落語中興の祖の1人、櫛職人の山生亭花楽が、下谷神社で一席伺ったのが、お金を取っての寄席の始まりと言えますが、後にこの席が大当りをして、花楽は櫛職人を止めて、落語(当時は、軽口、昔話又は落し話と呼ばれていた)一本で食べて行くと決めた後に、三笑亭可楽と改めた訳です。私が思うには、その時、可楽は大好きな事を演^やって飯が食えるのなら、多少の苦勞は厭^{いと}わない！との想いが在ったと勝手に察しておりますが、その後、林家正蔵、三遊亭圓生、朝寝坊

むらく、船遊亭扇橋、喜久亭寿楽、三笑亭佐楽等の「可楽十哲」が弟子と成った時点で、この者達が生きている間は、落し話も続くだろうと思ったに違い在りません。それが、時代を越えて今日まで繋^{こんにち}った訳です。今の噺家さんのほとんどが、大学、高校を問^とず落語研究会出身者ですから、素人落語から本職に成った方達テエ事です。現人間国宝の柳家小三治師匠も、高校生の時に、ラジオ東京（現TBSラジオ）の「しろうと寄席」で鐘を鳴らした1人ですから。只、噺一本で食べて行くには、相当の苦勞が在ると思います。

第一回 小天狗よったり会

日時 平成三年十月二十日（日）午後一時三十分開演

席場 神楽坂毘沙門天ホール（神楽坂駅又は飯田橋駅下車）

木戸 五百円

問合せ （三四五一）三七一七 小田島

一、開口一番組
軒付けぬずらし家 芝楽
大工調べぬりた亭 津久蔵
（仲入橋ノ百圓）

一、品川心中 柳花楼 扇生
一、寄席の唄 福岡 民江
一、ねずみめずらし家 芝楽

協力 全日本社会人落語協会（JARRA）
東京かわら版／扇生会

お囃子 福岡民江社中